



Title	名詞の同格節における接続詞thatの有無について : インターネットのオンライン検索 Cobuild Direct を利用して
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪外大英米研究. 1996, 21, p. 71-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99198
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

名詞の同格節における接続詞 *that* の有無について —インターネットのオンライン検索 CobuildDirect を利用して—

大 津 智 彦

0. はじめに

CobuildDirect とは、辞書などの出版で知られるイギリスの Collins 社が同じくイギリスの Birmingham 大学と共同で開発を進めている、現代英語では最大級のコンピュータコーパス The Bank of English の一部にインターネットを通じてオンライン検索を可能にしたサービスである。

まず母体にあたる The Bank of English (以下 BOE) の現況について若干の説明を加えておきたい。BOE は1995年10月時点で入手した情報によれば、¹⁾総語数約 2 億1,100万語に及び、現代英語では現時点において世界最大のコーパスである。書き言葉、話し言葉の両方が収集対象となっており、前者は新聞、雑誌、フィクション、ノンフィクション、書簡、パンフレット、ビラなど、後者は日常会話、ラジオ放送、会議、会談、討論などから成っており、広範囲の言語データを集めている。また、常に内容がアップデートされていることが特徴で、現在テキストの大部分は1990年代に起源を発するものであるという。現代英語を記述的な視点から研究するものにとって、BOE はその規模といい、テキストの新しさといい、まさに理想的なコーパスである。しかし、残念ながらその全体の検索は共同開発の本部が置かれている Birmingham 大学においてしかできない。

一方、CobuildDirect (以下 CBD) は現代英語の研究・教育に携わる者を対象に、インターネットの “telnet” と “ftp” 接続の機能を利用して遠隔地にいながら、部分的にはあるが BOE の検索を可能にしたサービスである。検索可能なコーパスの語数は BOE の約十分の一である約2,050万

語である。このサービスは有料で、6ヶ月または1年を単位として一定の代金を支払うと user ID と password が与えられるので、それを使って接続するしくみになっている。母体である BOE に比べ規模が十分の一であるとはいえ、BOE は日本国内で利用できる現代英語のコンピュータコーパスとしてはもっとも大きなものである。²⁾ これまでコンピュータコーパスによる現代英語研究といえば、書き言葉では1961年に出版された印刷物からなる100万語の The Brown Corpus (アメリカ英語) 及びそれをモデルにした The Lancaster Oslo/Bergen Corpus (イギリス英語)、話し言葉では1953年から1987年の間に録音された材料からなる50万語の The London-Lund Corpus of Spoken English が用いられてきた。しかし、これらのコーパスは語数が少ないため調査対象となる文法・語法事項についての用例が十分集まらない場合が多いのが大きな難点であった。また、特に Brown、LOB では1961年当時の英語というテキストの古さも問題になりだしてきている。

CBD では、後に更に詳しく解説を加えるが、このような規模の問題については大きく前進している。テキストの新しさについてもすべてが1990年代のものなのでこの点について問題はないといえる。こういった利点に加えて、CBD の利用を検討すべき理由として、日本の各大学などでインターネット接続の設備が整いだしたことがある。筆者の場合もパソコンを研究室に引かれた LAN 回線に接続してインターネットを利用しはじめた。今回の調査は、以上のようなソフト・ハード両面における技術革新を生かしてどのような研究ができるのか、またどのような問題点があるのかを探る試みである。

1. CobuildDirect について

具体的な調査事項に入る前に CBD の内容についてももう少し詳しく触れておきたい。CBD を利用するためにはまず前提としてインターネットの“telnet”と“ftp”の機能が使える環境にあることが必要である。これは研究室などに設置された LAN 回線により接続する以外にも、インターネットにつながったホストコンピュータへ公衆回線を通じてモデムによって接続

しても利用可能である。“telnet”とは遠隔地にあるコンピュータに接続してそれを手元の端末（パソコンなど）から操作する機能である。今回の場合、CBD のデータベースを収めたコンピュータが遠隔地にあるコンピュータにあたる。“ftp”は“telnet”によって検索をおこなって得た結果を自分の端末に出力するため転送する機能を果たす。

さて、CBD で検索可能なコーパスは次の通りである。

American books (American fiction and non-fiction books)	250万語
Ephemera (Brochures, junk mail, leaflets...)	180万語
Magazines (Weekly and monthly publications)	260万語
American radio (Transcripts of American radio shows)	270万語
British books (British fiction and non-fiction books)	250万語
Spoken (Transcribed spontaneous speech)	320万語
Times newspaper (The British broadsheet)	270万語
Today newspaper (The British tabloid newspaper)	250万語

検索は上の8つのカテゴリーの中から一つ又はそれ以上の数のコーパスを選んでおこなうことになるが、各コーパスについてオンライン又はマニュアルで与えられている出所などに関する情報は以上がすべてである。ここでコーパス言語学をおこなう者にとって二つの大きな問題があることを述べておかなければならない。一つは、上の表を見てわかるようにコーパスの分類方法があまりにも大雑把になっている点である。American books と British books において fiction と non-fiction が一つにまとめられているが両者の言葉は大きく違うはずである。Magazines においても Monthly and weekly publications というが、学術的なものからジャーナリスティックなもの、趣味に関するものまで幅が広いはずである。Spoken については spontaneous といっても場面や話者によって言葉は異なるものである。

二つ目は、上のような問題を含みながら、CBD では検索した用例につい

てその出所を確認する方法が与えられていないことである。Spoken のコーパスにおける話者の年齢、性別、社会的階級はもちろんのこと、American books、British books、Magazines における書名・雑誌名など一切明らかにされていない。この点を Cobuild に問い合わせてみたが、そういった情報は Cobuild 側で調べることはできるが CBD のオンラインサービスでは提供していないという返事であった。³⁾ 尚、上の表で Ephemera、Magazines、Spoken ではイギリス英語かアメリカ英語かについての表示がないが、イギリスで発行されたか収集されたものであるとのことである。

以上の二点は、社会言語学的な視点を取り入れることが研究の重要な部分を成すコーパス言語学にとっては残念ながら相当不都合なことであり、研究の可能性を制限する要因となっている。Cobuild 側の今後の改善を望みたい。現況においては、与えられている分類の中で工夫して社会言語学的な視点を取り入れるしかない。

次に検索方法に関してであるが、CBD において検索結果は KWIC 形式のコンコーダンスで表示される。検索にはいろいろと重宝な機能が用意されており、2 語以上からなる句の検索やワイルドカードによる検索が可能のほか、各語に品詞、数、時制、その他のタグが付されているのでそれを元にした絞り込みもできる。さらに検索結果に対してもコンコーダンス・ラインの並び換え、正規表現に一致する文字列の選択・排除、コロケーションの統計的分析など数種類の加工がおこなえる。現在パソコンなどで利用できる検索プログラムに比較して格段に優れた検索機能が提供されている。ただし問題が無いわけではない。一番の難点は CBD では検索語を含む文脈を 5 行までしかスクリーン上に出せないことである。⁴⁾ 特に Spoken のカテゴリではその性格上、言い誤り、くり返し、その他構文の乱れなどが頻発しており、5 行の文脈では何が話題なのかわからない場合が多い。

検索し、加工した結果はファイルとして名前をつけて Cobuild のコンピュータに保存することができる。保存したファイルは後から“ftp”を使って自分の端末に転送すればよい。

2. 1 調査対象

さて、いよいよ今回調査の対象となる構文に話しを移したい。現代英語では *that* に導かれる名詞節（いわゆる *that* 節又は内容節）は次のような環境に現れる。⁵⁾

- (1) I suspect (that) he is right.
- (2) John is aware (that) he should have told the truth.
- (3) We have the idea (that) he is not quite honest.
- (4) The fact is (that) she loves you.
- (5)(a) That he is alive is certain.
(b) It is certain (that) he is alive.
- (6) I know nothing about him except (that) he is an Englishman.

(1)–(6)において(5)(a)の構文を除き接続詞 *that* が使われない場合があることはよく知られた現象である。しかし、従来の記述ではこの *that* 節における *that* の出没が、どのような時にどの程度起こるのかについて十分に扱われることがなかった。たとえ扱われたとしても、一部の構文（特に(1)）に対する多分に主観や印象に基づく記述が与えられるだけであった。筆者はこの文法現象についてより客観的な記述を与えるため、これまでに *that* 節が(1)のように動詞の目的語になる場合、(2)のように形容詞の補文になる場合についてコーパスを用いた統計的研究を行ってきた。今回の調査はその一環として、(3)の名詞の同格節における接続詞 *that* の有無を扱うことにしたい。

言語学者のなかには統計的手法を用いた記述的研究に理解を示さないむきがあるが、辞書、文法書にある言語現象に関する記述がしばしばいかに中途半端で不十分であるか、その様な記述の上に理論を築くのがいかに危険であるかを振り返ればコーパスによる研究の意味は歴然と明らかになろう。

2. 2 従来の記述

まずはじめに今回扱う問題がこれまでに語法書、文法書ではどのように扱われているか見てみたい。上に述べたように多くの場合、*that* の有無に関する言及は *that* 節が動詞の後に続く用例を中心に行われている。筆者が調べた範囲では、Greenbaum and Quirk (1990)、*Cobuild English Grammar*、Fowler and Fowler(1937)、Quirk et al (1985)、Swan(1980) には、動詞の目的語となる *that* 節又は形容詞の補文の *that* 節に関して記述はあっても、名詞の同格節における *that* の有無に関して特に言及がない。一方、次の書物には短いながら言及があった。出版された年代に幅があるが、年代別の記述の変化を明らかにする目的で古いものから挙げることにする。

Jespersen(1927) では *conviction*、*notion*、*idea*、*reason*、*fact* のような名詞の後に *that* 節がくる時は *that* は不可欠であるとしている。ただし、口語体において、“I have a notion”、“I have an idea” のように “I think” と同じ意味になる時は類推的に *that* が省略されることがしばしばあるという。⁶⁾

Poutsma (1929) は名詞の同格節においては接続詞 *that* は決してあるいは滅多に抜けることがないとしている。ただし、“I have a notion”、“I have an idea” に関しては Jespersen (1927) と同様の記述がみられる。⁷⁾

Kruisinga (1932) は名詞の同格節は必ず接続詞 *that* を伴うと断定している。⁸⁾

Fowler(1965²) では名詞の同格節において *that* を省略することは賢明ではないとなっている。⁹⁾

Close (1975) は *that* 節が名詞の同格になる構文を次の(7)と(8)に分け、(7)のように同格節が制限的に続いている場合には *that* が省略されることがときどきありうるとしている。¹⁰⁾

(7) We must face the fact that we have spent all our money.

(8) The hard truth, that they had spent all their money, was a great

shock to her.

筆者が調べたなかで、上記 Close (1975) は名詞の同格節で *that* が現れないことがあるのを認めている唯一の文法書であるが、それがどういう場合にどの程度起こるのかについてはまったく触れていない。

以上が今回の調査対象について現時点で語法書、文法書から得られる情報である。名詞の同格節で接続詞 *that* は用いられるものであると断言的な判断を下している文法書が大部分であるが、それがそのまま正しいのであれば議論をそこで終えてよい。しかし、それらの文法書が時代的に比較的古いものであること、時代的に新しい文法書になると *that* の省略の可能性を認める表現があることを考えあわせると、この問題について実態を一度詳しく調べてみる必要性が明らかになってくるのである。

3. 1 実態の調査

that 節における接続詞 *that* の有無を左右する要因として文体の formality が重要な役割を果たすことが従来から知られており、また筆者が過去に行った研究においても実証されている。今回の調査においても違った文体を持つテキストの比較をする必要が当然あるが、上記のように CBD ではテキストのカテゴリー分けがうまくできていない。そのような中において CBD には文体における formality の違いを端的に示すと思われる 2 つのカテゴリーとして Times newspaper と Today newspaper がある。前者はイギリスを代表する高級紙 *The Times*、後者は大衆紙として知られる *Today* をテキストとしたコーパスである。その記事の内容と読者層から、Times newspaper は非常に形式ばったコーパス、Today newspaper はどちらかといえばくだけた部類に属すコーパスと見られる。今回は文体の違いによる影響を調べるためにこの 2 つのコーパスを選択した。¹¹⁾ さらにそれとは別に媒体の違いによる影響も見ると話し言葉のコーパスである Spoken も検索対象とした。

用例の収集には、同格の *that* 節を導く名詞のうち頻度が高いと思われる

6つの名詞 *belief*、*feeling*、*hope*、*fact*、*idea*、*possibility* を選んだ。¹²⁾ *belief*、*feeling*、*hope* は *that* 節を導く伝達動詞とそれぞれ派生関係を持ち、*fact*、*idea*、*possibility* はそのような派生関係を持たないものである。用例の収集は CBD に “telnet” で接続した後、コンコーダンス・プログラムで各語を含むすべての用例について *that* の有無に関係なく KWIC 出力を行った。KWIC 出力に際しては、既に述べたような機能を使って用例の絞り込みや排除ができる。しかし、CBD のコーパスにはタグが付いているものの、音あるいは文字として形を持たない語 (zero form) にまではタグをつけていない。よって *that* が現れない場合の *that* 節を拾い出すためにはかなりの手作業も必要であった。¹³⁾ KWIC 出力の結果はいったんファイルとして CBD のホストコンピュータに保存してから “ftp” によって筆者のパソコンまで転送した。

3. 2 調査結果

筆者がこれまで動詞、形容詞に導かれる *that* 節における *that* の有無を調査したなかで、この現象に大きな影響を与える要因として、①テキスト (コーパス) のカテゴリー、② *that* 節を導く語による違い、③ *that* 節の主語の種類、④接続詞 *that* 前後での副詞類の挿入の有無、があることが確認されている。表 1 ではこの内①と②の要因の影響が浮き彫りになるよう検索結果をまとめている。

表の分析に入る前に述べておくべきことは、一部例外があるが、どのカテゴリーのどの語においてもほぼ満足のできる数の用例が抽出できたことである。Brown、LOB ではもっとも語数の多いカテゴリーでも16万語であるが、その程度の語数では今回の調査は不可能であったであろう。コーパスは大きければ大きいほど研究の可能性は広がるものである。

ではまずこの表からわかることを挙げてみたい。全体的に言えることは、動詞、形容詞に続く *that* 節の場合ほど頻度は高くないものの、現代イギリス英語において、名詞の同格節で接続詞 *that* が用いられない場合 (以下

表1 名詞の同格節における接続詞 *that* の有無

Z(ero):*that* を伴わない t(hat):*that* を伴う

	Times		Today		Spoken		合計	
	z/t+z	(%)	z/t+z	(%)	z/t+z	(%)	z/t+z	(%)
<i>belief</i>	1/56	1.8	1/31	3.2	0/7	0.0	2/94	2.1
<i>feeling</i>	3/38	7.9	6/34	17.6	19/70	27.1	28/142	19.7
<i>hope</i>	1/29	3.4	5/22	22.7	0/4	0.0	6/55	10.9
<i>fact</i>	4/269	1.5	45/278	16.2	20/347	5.8	69/894	7.7
<i>idea</i>	4/45	8.9	12/39	30.8	7/47	14.9	23/131	17.6
<i>possibility</i>	1/30	3.3	1/14	7.1	1/8	12.5	3/52	5.8
合計	14/467	3.0	70/418	16.7	47/483	9.7	131/1368	9.6

$$\chi^2=48.17; p<0.01^{14)}$$

zero 節) は十分にあり得るということである。ではそれはどのようなパターンを示しているだろうか。最初にカテゴリーの違いの観点から見てみる。それぞれのカテゴリー別に合計欄を比較すると、特に Times と Today の差の大きさが目立つ。形式ばっているとされる Times は全体で zero 節の比率が3%と非常に低いのに対し、くだけているとされる Today ではその5倍以上の16.7%である。接続詞 *that* は formality の程度が低いほど省略される傾向があることが、名詞の同格節においてもはっきりと実証されたことになる。

問題はここで Spoken のカテゴリーがどう関わるかであるが、Spoken の zero 節の比率は全体で9.7%とちょうど Times と Today の中間に位置し、媒体が話し言葉であっても *that* の省略傾向が特に増すものではないことを示している。このことから、媒体が話し言葉である場合、一概に *that* の比率が増すと決めつけるのは誤りであることがわかる。ちなみに、spoken language と colloquial language は混同されがちだが、これは従来の語法・統語法の研究において話し言葉は一括して colloquial language として扱われ、その formality のレベルを分けて分析する視点が欠けていたためである。今後、話し言葉でもこういった視点の入った研究が必要である。

次に同格節を導く名詞別の差をみていく。合計欄からは *feeling*、*idea*、*hope*、*fact*、*possibility*、*belief* の順に zero 節の比率が高いことがわかるが、特に *feeling* と *idea* はどのカテゴリーのコーパスにおいても zero 節の比率が高いことに注目したい。これにはどのような理由があるのだろうか。*feeling* と *idea* をもつすべての用例を調べたところ、*feeling* においては zero 節の28例中27例までが、*idea* においては zero 節の23例中18例までが “I have an (the) feeling”、“I have an (the) idea” という形をとっていることがわかった。¹⁵⁾

(9) *I've got a feeling they haven't sent us any individual ones.*
[spo00001169]

(10) *You get the feeling he doesn't even much like money.*
[tim00010892]

(11) *No one had any idea this was coming.* [tim00030992]

(12) *We had no idea it would be this unbelievable amount.*
[tod00005175]

feeling では “There is a (the) feeling...” という形式も多かったが、zero 節を取る例は 1 例もなかった。

また *idea* では、zero 節の残り 5 例内、4 例までが(13)、(14)のように *idea* を含む句が文の主語になっていた。吉村 (1992) においても(15) (吉村 (1992) の (6b)) のように *reason* に zero 節が続く場合主語になりやすいとの報告がある。

(13) *So the idea we never have a cross word is totally wrong.*
[tod00005201]

(14) *The idea they were seeking adventure really belongs in story books.*
[tod00005210]

- (15) *The only plausible reason he has not translated his “war on drugs” rhetoric into military action is that he knows that to do so risks unacceptable consequences.* [tod00040992]

これらの文においては、*that* を省略したほうが主節の主部が簡潔になり、述部の動詞との結び付きが知覚されやすいという perceptual strategy が働いているものと思われる。

以上のことから、*feeling*、*idea* で zero 節の比率が高いのはそれぞれの語がとる特有の構文が大きな理由になっていることがわかる。

さて、次は上に挙げた要因の内、③ *that* 節の主語の種類、④ 接続詞 *that* 前後での副詞類の挿入の有無、が与える影響について見てみる。まず、③ *that* 節の主語の種類についてであるが、表 2 は zero 節を持つすべての用例についてその節の主語が代名詞かそれ以外であるかによって分類したものである。⁶⁾ 表は動詞、形容詞に導かれる *that* 節の場合と同じく、名詞に続く同格節の zero 節でも主語が代名詞のことが圧倒的に多いことを示している。

表 2 zero 節における主語の種類

	代名詞(p)	その他(o)	p/p+o(%)
<i>belief</i>	2	0	100.0
<i>feeling</i>	22	6	78.6
<i>hope</i>	5	1	83.3
<i>fact</i>	53	16	76.8
<i>idea</i>	19	4	82.6
<i>possibility</i>	2	1	66.7
合計	103	28	78.6

- (16) *The textiles and engineering group raise a Pounds 39 million issue, in the belief it would allow it to expand into the imminent economic recovery.* [tim00090992]

- (17) Mrs Williams told Mr Shaughnessy's chief in the hope *he* would get him to "cool it". [tim00090792]
- (18) Any doctor who thinks there is a possibility *they* may have been infected with HIV should seek appropriate diagnostic testing and counselling. [tim00040992]

最後に ④ 副詞類の挿入の有無が及ぼす影響に関しては、すべての zero 節の用例131例の内、副詞類の挿入があったのは次の1例だけだった。やはり zero 節では副詞類が接続詞 *that* の前後に挿入されていないことが大きな条件となる。

- (19) Take this one fact *last year* the Third World paid the rich countries twenty billion dollars more in interest payments. [spo00000787]

ただし、この話し言葉の例は CBD ではこのように転写されているが、実際は *fact* の後に休止があり、*last year* から新しい文が始まっているという解釈の可能性もある。

4. まとめ

that 節における接続詞 *that* の出沒に関する研究の一環として今回は名詞に続く同格節における *that* の有無を調査した。その結果、Jespersen、Poutsma、Kruisinga、など今世紀前半の文法家の指摘に反して、名詞の同格節において接続詞 *that* は十分省略されるものであることがわかった。ただしそれには傾向があり、formality が低いほど *that* は落ちやすく、また、特定の構文、例えば "I have a (the) feeling"、"I have an (the) idea" などに偏った *that* の省略のパターンが認められた。そして今回もまた *that* 節の主語の種類、副詞類の挿入の有無が大きな影響力を持つことが確認された。

この調査は、最近注目を集めだしているインターネットを利用して、オンライン検索コーパスである CBD を初めて使い行ったものである。上に指摘したように、CBD はサービスが始まってから日が浅いので問題を含んでいる。特に社会言語学的に精密なコーパスの分類方法の導入が是非とも必要である。入力ミス、タグの誤りも散見される。しかし、CBD の2050万語という規模は国内で使える現代英語のコーパスとしては最も大きく、今回の調査もこの規模のコーパスがあってはじめて可能であった。これまで手付かずで置かれてきた数々の問題に関する研究の可能性が生まれてきたといえよう。

注

- 1) World Wide Web (WWW) の http://titania.cobuild.collins.co.uk/boe_info.html 参照。
- 2) もう一つの大きなコーパスプロジェクトとして、イギリスで Oxford University Press、Longman Group、Lancaster University、Oxford University Computing Services、Chambers、British Library が共同で開発した1億語の The British National Corpus がある。これは CD-ROM 化され検索ソフト付きで配布が始まったが、1995年時点では利用が許可されているのはヨーロッパ連合内においてのみである。
- 3) ただし、別料金を払えば情報を提供できないこともないらしいが、どこまで詳細に調査してもらえるか不明である。
- 4) 端末のプリンターには512文字（6行程度）まで出力可能。尚、Birmingham の本部では検索語を含むテキスト全部を参照できる。
- 5) ただし、(6)において、普通現代英語では前置詞の後に *that* 節が続けられないので、*except that*、*but that*、*in that* などの語群を従属接続詞としてみなす場合が多い。
- 6) Jespersen (1927), pp. 35-6.
- 7) Poutsma (1929), pp. 369-75.

- 8) Kruisinga (1932), p. 374.
- 9) Fowler (1965²), pp. 623-4.
- 10) Close (1975), pp. 43-4.
- 11) Kilby (1984), pp. 178-80 では *The Daily Telegraph*、*The Daily Mail*、*The Sun* の3紙について *that* の有無の調査を行っている。
- 12) 頻度が高い名詞を選んだのはできる限り多くの用例を集めるためである。
- 13) 検索対象を上の6つに限ったのはこの理由による。
- 14) カテゴリーの種類と *that* の有無の独立性を検定。
- 15) この構文が zero 節をとりやすい理由は Jespersen (1927)、p.36を参照。
- 16) “there” 構文のいわゆる “空の there” は代名詞の方に算入した。

参考文献

- Bolinger, D. (1972) *That's That*. The Hague: Mouton.
- Close, R.A. (1975) *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.
- Collins Cobuild English Grammar*. William Collins Sons Co Ltd., 1990.
- Elsness, J. (1984) “*That or Zero? A Look at the choice of Object Clause Connective in a Corpus of American English*” *English Studies*, Vol. 62: pp. 519-33.
- Fowler, H.W. (1965) *Fowler's Modern English Usage*. 2nd ed. Revised by Sir Ernest Gowers. Oxford: Oxford University Press.
- Fowler, H.W., Fowler, F.G. (1931) *The King's English*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press
- Greenbaum, S., and Quirk, R. (1990) *A Student's Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Jespersen, O. (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part III. London: George Allen & Unwin Ltd; reprint ed., Tokyo: Meicho Fukyu Kai, 1983.

- Kilby, D. (1984) *Descriptive Syntax and the English Verb*. London: Croom Helm.
- Kruisinga, E. (1932) *A Handbook of Present-Day English*. Part II. Vol.3. Groningen: P. Noordhoff.
- McDavid, V. (1964) "The Alternation of *That* and Zero in Noun Clauses." *American Speech* 39: pp. 102-13.
- 大津智彦 (1993) 「現代イギリス英語における目的節を導く *that* の有無について」『論集』(大阪外国語大学) 第9号, pp. 41-50.
- (1994) 「現代英米語における目的節を導く *that* の有無: 通常 *that* を伴うとされる動詞について」『英米研究』(大阪外国語大学) 第19号, pp. 247-60.
- (1995) 「形容詞に続く名詞節における接続詞 *that* の有無について」『英語コーパス研究』(英語コーパス研究会) 第2号, pp. 27-43.
- Poutsma, H. (1929) *A Grammar of Late Modern English*. Part I. Groningen: Noordhoff; reprint ed., Tokyo Senjo Publishing Co., 19--?.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rissanen, M. (1991) "On the History of *that*/zero as Object Clause Links in English." In *English Corpus Linguistics*. pp. 272-89. Edited by K. Aijmer & B. Altenberg. London: Longman.
- 齊藤俊雄 (編) (1992) 『英語英文学研究とコンピュータ』東京: 英潮社.
- Swan, M. (1980) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- 吉村由佳 (1992) 「コーパスに見る reason why --その文脈と使用条件--」日本英語学会第10回全国大会ワークショップ発表.

